

新世紀人文学研究通信

発行日：2026年7月15日

New Century Humanities Research News／新世纪人文研究简报／新世紀人文研究新聞／신세기
인문학 연구 뉴스／ข่าวการวิจัยมนุษยศาสตร์แห่งศตวรรษใหม่／Berita Penelitian Humaniora Abad Baru…

編集 新世紀人文学研究会 〒813-8503 福岡市東区松香台 2-3-1

九州産業大学国際文化学部 酒井順一郎研究室 superfunkyjun@yahoo.co.jp

発行 亜細亜総合企画工房 〒353-0005 埼玉県志木市幸町 1-7-17 hiroshitanaka724@gmail.com

【ごあいさつ】

急に「何か」が悪くなったときに

田中 寛

新世紀人文学研究会代表

最近、“急に具合が悪くなる症候群”に苛まれている節がある。いったい、どういうことか？

例年暮れから『新世紀人文学論究』の編集に入り、年明けにデータを印刷業者に送るのがここ数年の習わしだが、二月初旬の納品後に急に体調に違和感を覚えた。体内の地震、津波の予兆だった。

濱口竜介監督の映画「急に具合が悪くなる」が静かな話題作として注目されている。前作の「ドライブマイカー」も長篇だったが、今回の作品も三時間を超える。主演はヴェルジニー・エフェラ、岡本多緒。近くにいた人が急に病気（癌）になった時に周囲はどう向き合い、対処するのか、という関係性の本質をみつめた魂の記録だが、もとは原作の同名の書簡集である（晶文社、2019年初版）。著者は哲学者の宮野真生子、人類学者の磯野真穂。概要は帯文をそのまま引用する。

もし、あなたが重病に罹り、残り僅かの命と言われたら、どのように死と向き合い、人生を歩みますか？ もし、あなたが死と向き合う人と出会ったら、貴方はその人と何を語り、どんな関係を築きますか？ がんの転移を経験しながら生き抜く哲学者と、臨床現場の調査を積み重ねた人類学者が死と生、別れと出会い、そして出会いを新たな始まりに変えることを巡り、20年の学問キャリアと互いの人生を賭けて交わした20通の往復書簡。

最近、この「具合」を変換ドリルのように、「急に＜関係＞が悪くなる」、「急に＜気分＞が悪くなる」のように「急に～なる」の文を作っているときがある。というのも、年が明け二月の中頃に、急に胸のあたりがしめつけられる苦しさを感じ、医師から循環器の疾患を告げられたからである。医師は「危ない病気ですが、軽症でよかったです」と言われたものの、この5年間を生存確率のように言われたときはさすがに滅入った。余命を宣告されたわけではないが、それに近い感覚だ。寝耳に水であったが、「急に」というのは口実の言い換えにすぎず、実際のところははるか以前から兆候があったのに、傲慢にも放置していた、というのが正直な告白だ。退職後はコロナ禍に見舞われ、漸く「収束した」のを待って予定していた自宅のリフォームを実行し、それから終活に向けてのさまざまな課

題をこなしていくうちに、疲労が蓄積していたことは否定できない。それ以前に現職の頃も何かと無理をしていたこともあって、疾患発症の「下地」はとうに出来上がっていたのかもしれない。

さて、「急に具合が悪くなる」というのは、悪くなること自体が対象ではなく、その事態とどう向き合うかという、いわば周囲のケア、カウンセリングの問題が大半である。具合が悪くなるのは珍しいことではないが、対処の仕方は千差万別だ。身体に異常を生じなくても、交通事故や地震などの自然災害に人間の生命は常に曝されている、いつそれが決壊し、崩落するか分からない。生きていることは奇蹟でもある。日常はあまりに雑多で目まぐるしく、リスクの可能性について明確に教えられることもなければ、親身に考えることもない。病気になって初めて健康の有難さが分かる。親が死んで初めて親の存在が分かるように、ただ気が付かずに（気付こうとしないで）看過しているだけである。だが、ある日、現在の食生活や生活習慣を変えることを厳しく細かく指示されれば、自ずと今後の人生のために自己管理を徹底しなければならなくなる。そのときになって、いかに日頃、自分の肉体を「無視」していたかが分かる。決まった時間に投薬をし、定時的にリハビリを続けて肉体の構造を観察しなければならない。新たな自己覚醒だ。生き方が変わらない筈がない。こうして、私たちはどう対処するかを常日頃考えておかねばならない。リスクは一回性ではない。再発への対策、監視、留意が絶えず求められる。戦争の教訓は常に語られても、活かされることは思いのほか少ない。人間は懲りない性分だ、とつくづく思い知らされる。

ことは自分や周囲の肉体的疾患の発症現象だけではない。人間関係もそうだし、自分を取り巻くさまざまな環境一切がそうだ。一寸先は闇、昨日の友は今日の敵というではないか。蜜月は単なる風見鶏の兆候としてうけとめるべきだろう。国と国の関係も例外どころではない。「〇〇有事」もまた然り、世界変動はちょっとしたミスマッチで起こりうることを考えれば、「存立危機事態」は常にマグマのように蠢動している。それをどう言語化するかはまた、それぞれの智慧なのだが。

ともあれ、今回の個人的な健康疾患の体験を通じて、我が内なる危機をどう乗り越えるのかを考えさせられた。と同時に、事態への「対面・対峙」と「対応・対処」の哲学を、根本から見直す機会ともなったことに不謹慎な感謝を感じているのである。

エッセイ(1)

伊東深水「南方風俗スケッチ」展を見て ——戦時期のインドネシアで、徴用画家がみたもの——

田中 寛
新世紀人文学研究会代表

戦時期というのは、広義には1931年9月18日の柳条湖事件、満洲事変からを指す。1937年7月7日の日中戦争勃発後、多くの従軍画家が中国大陆に派遣され、「聖戦」を描き続けた。これは戦場と銃後をつなぐ、戦意高揚の国策でもあった。二年目の1939年7月には、朝日新聞社編『聖戦美術展集』が発行され、新聞紙上にも大きく宣伝された。広告には「壮観！戦時美術の神髄は今や全巻に躍如たり矣！」、「事変二周年、我が美術界の精鋭をすぐり銃後の熱賛を博せる聖戦美術展の感激を一冊に収む空前の戦時総合美術大画報！！」と銘打たれた。戦争と美術に関しては、これまで多くの考察、検証がなされて

きた太平洋戦争開戦後も徴用画家は、「彩管報国」の使命を帯びて南方（現在の東南アジア）に派遣され、現地の戦い、風物を描き続けた。伊東深水はその代表的な画家である。伊東は当時、著名な日本画家、木版画家で、とくに美人画を得意としていたが、その卓越した人物画の技量が認められ、南方スケッチを画くことになった。多くの従軍、徴用画家が戦場を描いたのに対し、伊東は南方の暮らしを描いた。

5月のある日、千葉県の市川市にある芳澤ガーデンギャラリーに足を運んだ。日暮里から京成線に乗り、京成真間下車、十五分ほどで到着した。もと外務大臣の過ごした屋敷を拡充したギャラリーだが、庭園も広々としていて気持ちが良い。「伊東深水南方風俗1943」（下右図）と題された展示は、これまでも数回催されているが、今回は「圧巻の素描コレクション」から約150点を一挙公開、このほかにも市川市初公開の作品18点が展示された。彩色では、「ジャワスカブミ清貧遊岡市場にて」（1943.4.17）「バンドンにて」（1943.4.20）、「マカッサル郊外にて農民の水甕」（1943.5.21）「飛行機上より見たる雲の美観」（1943.6.16）をはじめ、多くの作品が展示された。

伊東は、1943年4月から四か月間、海外報道班員としてシンガポール、セレベス、ボルネオ、バリ島など南方に派遣された。国威発揚の戦争画以外に、日本国民への南方知識を啓蒙する目的もあっただろう。『伊東深水全集』（第六巻、集英社、1982）によれば、この間、四千枚の写生をし、六月から現地の各所でもスケッチ展を開催した。帰国後9月には第二回航空美術展（日本橋高島屋）に「機上より見たるジャワ富士」を出品した。また10月には日本橋三越にて「南方スケッチ展」を開催、二百点を出品した。同月銀座田屋画廊で「南方風物小品展」を開催、また東京美術館では第六回新文展に「南方収穫図」を出品、精力的に南方風俗の展示に尽力した。なお、伊東の南方滞在期間中、4月18日に山本五十六元帥がラバウルからブナンに移動中に「双胴の悪魔」、米軍戦闘機ロッキードライトニングP38の来襲を受け、ブーゲンビル島上空で撃墜され戦死した。「海軍甲事件」である。この経緯については吉村昭『海軍乙事件』（文春文庫）、高城肇『六機の護衛戦闘機』（潮書房新光人社文庫）などを参照。米軍は改編されたばかりの日本軍の暗号をいち早く解読、ゼロ戦護衛戦闘機の必死の抵抗もむなしく、山本の搭乗機一式陸攻を難なく屠った。伊東はこの悲報をいつ、どこで聞き、どう思ったのだろうか。

約四か月間の南方滞在は伊東の長年にわたる画業のなかでひととき特別な意味を持っていたであろう。戦後では敗戦から十九年後、1964年6月にインドネシア、スカルノ大統領の招きでインドネシアを訪問、一ヶ月余の滞在中多くの写生をし、また多額の寄付をして帰国した。同年11月には東京都美術館にて第七回文展に「バリ島の舞姫」を出品、また翌年3月には日本橋三越に於いてインドネシア旅行展を開催、「バリ島風景」、「魚市場」、「ジャカルタ市長の家」などのスケッチとそれをもとにした新作8点を出品した。伊東のインドネシアに寄せる郷愁を強く感じさせるものである。なお、市川市とメダン市は、伊東の結んだインドネシアと日本の両国の友好の絆を祈念し、姉妹都市関係になっている。

ところで「風俗スケッチ」というのは、暮らし、生活といった意味で、前線の戦場ではなく、平穏な暮らしを描いたところに特徴がある。現代から見ても、その画題、人物の表情は生き生きとしており、当時の貴重な文化、生活の記録となっている。特筆すべきは軍事郵便絵はがき（下左図、筆者所蔵）にも取り上げられていることで、当時の日本人の南方認識の一端をうかがわせる表象ともなっている。

当時は徴用画家といえどもカメラは稀少で携帯するのも不自由だった。ただひたすら肉眼を通して現地の姿を描きとどめた。伊東が南方風俗を描いたのは、戦争という歴史のうねりの中だった。戦争がなければ、美人画の世界にあり続けただろうし、南方という異文化の世界に遭遇する機会もなかっただろう。戦争と美術は不思議な因縁を持つことをあらためて考えさせられる。世界は今も戦争、戦禍が絶えず、人類は悲惨な過去から教訓を学び取ろうとしない。日々報道されるニュースの映像、写真にも惨状を想像する力を失いかけている。絵画は写真や映像とは異なる迫力があり、何時間も何日もかけて描か

れた。それだけ作者の思いが伝わってくる。

さて、今次の戦争、戦禍でどのような戦争画が描かれるのだろうか。



エッセイ(2)

日中の若者と共に感じた二百三高地の静寂

酒井順一郎（九州産業大学）

毎年、私のゼミでは海外での調査・研修を行っている。ここ 3 年ほど釜山を訪れてきたこともあり、そろそろ別の地で新しい学びを求めたいという空気がゼミ生の間に漂い始めていた。そんな中、一人のゼミ生が少し躊躇いながら「戦争や紛争、暴力に満ちている今だからこそ、二百三高地に行って色々と調べたいと思うんです。」と口にした。珍しく大きく出たものだ。しかし、その言葉には、史実と真正面から向き合おうとする若い感性の切実さが確かに宿っていた。研究室の空気がわずかに揺れ、皆がその思いの重さを受け止めているのが伝わってきた。ゼミとしての学びの幅が少し広がったように感じられた。こうして5月24日から29日までの行程で大連と旅順を訪れることとなったのである。

私事で恐縮であるが、大連は実に約20年ぶりである。空港に降り立った瞬間、まず視界に入ってきたのは、かつての記憶とはまるで違う。磨き上げられたターミナル、空港から地下鉄に乗れば、中山広場まで一本で行ける。便利になったものだ。そして、新旧の建物が層を成しながら変貌を遂げており、思わず歩みを止めてしまうほどだった。

到着の翌日、我々一行は二百三高地へ向かった。ふもとの入口から観光客を運ぶカートは営業をしていなかった。人影はなく風だけが草を揺らしている。仕方なく歩いて登ることにしたが、たかだか海拔203メートルの小山だと思ったのが甘かった。山というより丘に近いはずの斜面、歩き始めてすぐに我々の慢性的な運動不足を暴き出し、足は重く、呼吸は荒く、会話は途切れ、ただ黙々と一歩を積み重ねるほかなくなった。そのとき、ふと頭に浮かんできたのは、かつてこの地を駆け上がった日本軍兵士たちの身体であった。装備は重く、補給は乏しく、砲火は絶え間なく降り注いだに違いない。ましてや日本兵は朝鮮半島や遼東半島に上陸後、連日連夜野営をしながらの行軍である。我々が感じている疲労など彼らと比べることすらおこがましい。

歴史の現場に立つということはただ知識を確認することだけでなく身体の底に沈殿する感覚として過去を受け止めることなのだと、ゼミ生たちの黙した横顔を見ながら思った。

やがて「旅順口日俄戦争遺址」の標識が見え、頂上には慰霊碑「爾霊山塔」が立っていた。ご存知の通り、この塔は司令官であった乃木希典が建立したものである。乃木が詠んだ漢詩に「爾霊山は喚なれ

ども 豈攀じ難からんや～」といものがあるが「爾靈山」は 203（に・れい・さん）の当て字である。この「爾靈山」を慰霊碑に名付けたのであった。戦後、乃木は弾丸や砲弾の莢莢を拾い集めさせ、これらを鑄造し造らせたという。203 高地を奪取するだけで戦死者 5,500 人、負傷者 169,030 人を出した（塚谷周二「戦争・文学考―日露戦争の場合」『札幌大学女子短期大学部紀要』52・53、2009 年）。次男の保典実もここで戦死した。一個師団に相当する兵力を失ったのである。そして、当然、ここには多くのロシア軍兵士も眠っている。

ゼミ生は「静かすぎませんか。」と言った。周囲には誰もいない。いるのは我々だけだ。風の音さえも途切れ、ただ静けさだけが重く積もっていた。ここで激戦があったとはとても思えなかった。その沈黙を破ったのは、中国人留学生の小さな声だった。彼女は「ここで戦ったのは、日本とロシアですね。どちらも私の国じゃないのに、ここでこんなに血が流れたなんて。何だか不思議というか落ち着かない気分になります。」と言葉を探すように、しかしどこか恥ずかしそうに言った。旅順港の方角を見つめながらさらに続けた。「日露戦争のことは教科書で学びました。でも、こうして自分の足で登って誰もいない場所に立つと教科書とは違った感覚になります。自分の国ではない二つの軍隊が同じ土地で互いを殺し合っていた。その事実を前にすると正義とか悪とかそういう線引きがどこか遠くへ行ってしまうんです。」そこには、歴史を自分の身体で受け止めようとする若者の誠実さがあった。日本人学生はバツの悪そうな顔をし、黙るしかなかった。私はゼミ生の横顔を見ながら国籍や立場を越えて歴史の重さが人の心に沈んでいく瞬間を確かに感じた。風が一瞬、「爾靈山塔」の周囲を巡り、静寂をさらに深くした。我々はしばらく言葉を交わさず、それぞれの思いを抱えたまま、二百三高地の頂上に立ち尽くしていた。

その夜、ゼミ生と夕食を囲んだ。二百三高地、その日に訪れたロシアの三大永久要塞の一つである東鶏冠山北堡壘、そして「旅順口記憶」と名付けられた博物館について、さまざまな角度から議論をした。議論を主導するのは中国人留学生であった。歴史観の違いは確かにある。しかし、近代史に関する知識の厚みは、日本人学生を圧倒していた。フランスには「死者への最大の冒瀆は忘却である。」という言葉がある。死者を悼むとは歴史の記憶を手放さないことだという思想があるのであろう。一方、日本はどうであろうか。若者だけではない。大人もまた、歴史の痛点到に触れることを避け、国内でも国際社会でも議論することをどこかためらう。203 高地で感じたあの静寂と沈黙は、本来語るべきことを語らずにきた日本社会の怠惰の表れだといえなくもない。

忘却に身を委ね続ければ現実や歴史からただ遠ざかるだけだ。帰国便の中で私は日本の教育が何を育み、何を育まなかったのかを改めて考えざるを得なかった。

エッセイ(3)

フランス日本語教育シンポジウムに参加して ——ボルドー・モンテーニュ大学で考えたこと——

石橋教行
(英国日本語教師)

報告者は、本年 6 月 5 日・6 日に開催された、第 19 回フランス日本語教育シンポジウムに参加した。このシンポジウムは、ほぼ隔年で実施され、フランス日本語教師会が主催、開催地の大学が共催する形

式で、今回はボルドー・モンテーニュ大学が会場となった。自身は英国の日本語教育学会に席を置く身であるが、パリ・イナルコ大学の知人からの勧めもあって参加を決め、名詞「はず」の成立と近世／現代の用法について口頭発表した。同シンポジウムの参加は、2017年に次いで、これが2回目である。

本シンポジウムのテーマは、「文化的な創作活動と日本語教育」というもので、演劇や小咄など創造的な言語活動を通じて、自己表現の力を鍛え、また相互の文化理解も深めようという趣旨の取り組みである。基調講演は日本から金水敏／放送大学大阪学習センター所長を招いた「話体研究の提案-役割語、ヴァーチャル方言、翻訳話体-」、パリ＝エスト・クレティユ大学 Joëlle ADEN 氏の「演劇を実践的認識論として」と題するもの二つだった。口頭発表は14グループ、パネル発表が7点と盛り沢山で、ここでも創作活動を言語教育に取り入れるさまざまな試行が紹介されていた。

さて、前回参加のシンポジウムは漢字教育がテーマで、古典的とも言える課題だった。今回のテーマは、近年の日本語教育の進展や変容を反映したものだろう。創作的活動は、積極的な学習者の関与が期待できる反面、言語のあらかじめの習得が前提である。そして現場の実際にあっては、教科内容の消化と試験、その評価に汲々としている面も否めない。日本語教育は文化の発信に熱心であるが、受容の面ではどうだろうか。「作られた話体」は学習者からすると、アニメ・ドラマなどの媒体を通しての受容言語であり、熱心な視聴者にとっては理解言語でもある。そのような言語は、日本の日常には通用していない。よその国には見られない特殊な言語の存在を学習者に対象化して示すことも、一つの文化的側面の理解をうながすのであろう。

会場や懇親会では、フランスの先生方との交流があった。学費負担がないフランスの高等教育は、欧州最大の日本語学習者数3万人を誇る反面、継続的学習意欲の喚起が大切という。登録と実際の登校者数のずれ、学年が変わるたびに進級数が激減する状況もうかがった。職場では、有期雇用6年と雇い止めが制度となっていて、仕事先が変転し、先行き不安に直結しているようだ。言語コースの廃止、大幅人員整理に直面している英国の教育現場から見ても他人ごととは思えない。シンポジウムの成功の蔭に、多様な課題が思われた二日間であった。(写真はボルドー点景。本筆者による)



特別読物

文学研究・文芸創作誌『人間にとって』について

今般は『人間にとって』第2号をお送りいただきまして、誠にありがとうございました。

誌名から、高橋和巳の志を継承せんとするご意志を感じました。

これは『人間にとって』を送付した方からのお礼の言葉である。一昨年暮れに試みに『新世紀人文
学論究』の姉妹版、特集号と銘打って『人間として』を創刊した。鳥影社の『季刊文科』でも紹介され
たが、あくまで臨時的な特集号という認識だったため、不定期に出すことを念頭に置いていた。ところ
が、献本した国立国会図書館から書名(雑誌名)が異なれば、ISSNの別の登記が必要になることを指示
され、新たに手続きをとることになった、という次第であった。その一方で、同人誌的に定期的に刊行す
ることは、大きな決断を要する。原稿募集、集めから査読、編集、+データ入力、校正、印刷後は各機
関に送付する。これらの手作業は半端ではない。50数か所に寄贈、送付しても、礼状が来るのはほん
の数件である。世の中は、コスパやタイパを気にする時代。逆行をゆくには孤独に生きるしかない。

さて、どうするか。できるところまでやっていくしかない、というのが偽らざる心境である。以下、
2号の目次をご覧になり、助っ人、協力者があらわれることを夢見るこの頃である。

人間にとって 第2号 JUNE 2026 目次

巻頭詩 ——

埋み火

太田雅孝

巻頭論評(1) ——

同化と異化、あるいは順応と不適応に関する闘争

グローバル時代におけるそれぞれの正義

編集主幹

巻頭論評(2) ——

「として」、「にとって」に介在する外的・内的志向性(続)

あわせて複合格助詞言語行為論への序章

H・T生

◆ 批評 ——

「危機の文学」と「文学の危機」(続)

核時代に〈原爆文学〉はどう抗するか

忘却乃花

誰もが商品の価値を決めることのできる時代にあって

児玉雨子「目立った傷や汚れなし」論

東口昌央

◆ 創作(1) ——

[小説] 聖断(大嶋岳夫) / [小説] おっさんと少年(田中 寛)

◆ 高橋和巳小特集 ——

群衆の人びと——高橋和巳『憂鬱なる党派』再読—— 橋本安央

高橋和巳の『邪宗門』と『日本残酷物語』に関する一考察

附:『邪宗門』における歌舞伎観劇について

太田 寛

高橋和巳未発表草稿:「批評の任務」、「批評論」

解説: 田中 寛

高橋和巳「我が心は石にあらず」再読

書評(1) 高橋和巳のモチーフの変遷「我が心は石にあらず」にふれて

『立命館学園新聞』(第1096号)再掲

同編集局

書評(2) 高橋和巳著「我が心は石にあらず」

『三田新聞』(第1141号)再掲

同編集局

「我が心は石にあらず」にみる崩壊感覚

◆ 資料&研究 ——

戦場の宣撫工作に内在する救済と自己観照(2)

池澤茂「支那犬」、「慰問団」他を読む

田中 寛

戦争文学研究(2)

火野葦平のみた比島新文化運動の一端

『比島風土記』所収「比島の文化」より

戦争文学研究会

◆ 創作(2) ——

[小説] 夜の影 (川口啓史) / [小説] 煙 (続) (飯山恵子) / [随筆] 隣の町へ (飯山恵子)

[小説] 朝顔に乞う (大内華子) / [随筆] 自由連想にて (大内華子)

◆ 研究随筆 ——

杉原千畝記念館を訪ねて (飯山恵子) / チェンマイ日本語学校およびコタバルの調査から (山口雅代) / 日系インドネシア人との出会いと学び (伊藤雅俊) / 「ロンドン移民二十五年」(石橋教行) / 韓国は今 (酒井順一郎) / 「ポプラ坂」(大嶋岳夫)

◆ 読書園地 文学・歴史・言語の思索 ——

陽羅義光『心霊と文学 三浦清宏論』/ オーデン著、太田雅孝訳『アキレスの盾』・太田雅孝『太田雅孝詩集 裏木戸』/ 高木俊朗『特攻基地 知覧』/ 中尾茂夫『情報敗戦』/ 山梨正明『小説の描写と技巧 言葉への認知的アプローチ』/ 安藤宏『近代小説の表現機構』/ 金泰生『私の日本地図』/ 劉建輝他編『戦時下の大衆文化』/ 松元崇『武器としての日本語思考』

◆ 中国現代文学短篇小説 ——

嫁の実家

石舒清[著] 時衛国[訳]

哀悼・レクイエム

太田寛氏の急逝を悼む/ 石川忠先生を送る

新刊紹介/ 執筆者紹介・編集後記・原稿募集要項

A5判 308頁 定価 1,500円 (税込、送料込)

店頭では取り扱っていません。下記宛 (hiroshitanaka724@gmail.com) にご連絡ください。

編集後記

この通信は、年二回(6月、12月)発行している。研究会では、発足後暫く、小規模のシンポジウムの研究会を例年、春頃に開催していたのだが、発表者の打診も難しくなる一方で、教職者、研究者の各人の多忙さも考えると、簡単には実施できなくなってきたという事情がある。そこで、穴埋めという訳でもないが、日頃の研究、教育体験を発信していくことで研究会活動の一部とした。新世紀人文学研究会の日頃の実践報告を通して、混迷する時代を映し出していきたいと思っている。ご意見、ご感想などお待ちしている。

(編集：田中寛)